

職業実践専門課程の基本情報について

| | | | | | | | |
|---|--|-----------------------|--------------------------------------|----------|--|-------|----|
| 学校名 | | 設置認可年月日 | 校長名 | | 所在地 | | |
| 専門学校 麻生リハビリテーション 大学校 | | 平成13年3月30日 | 安藤 廣美 | | 〒812-0007 福岡県福岡市博多区東比恵3-2-1 (電話) 092-436-6606 | | |
| 設置者名 | | 設立認可年月日 | 代表者名 | | 所在地 | | |
| 学校法人麻生塾 | | 昭和26年3月12日 | 理事長 麻生 健 | | 〒820-0018 福岡県飯塚市芳雄町3-83 (電話) 0948-25-5999 | | |
| 目的 | 専門学校麻生リハビリテーション大学校 理学療法学科は、教育基本法の精神に則り、学校教育法並びに理学療法士及び作業療法士法に従い、高齢化社会、医療技術の高度化、リハビリテーションの専門化に対する人材確保の一翼を担い、医療及び保健福祉活動の充実発展に貢献するために理学療法士を養成する事を目的とする。 | | | | | | |
| 分野 | 課程名 | | 学科名 | | 専門士 | 高度専門士 | |
| 医療 | 医療専門課程 | | 理学療法学科 (夜間部) | | 平成25年文部科学 大臣告示第3号 | — | |
| 修業年限 | 昼夜 | 全課程の修了に必要な総授業時数又は総単位数 | 講義 | 演習 | 実習 | 実験 | 実技 |
| 4年 | 夜間 | 3150 | 780 | 1410 | 960 | 0 | 0 |
| 単位時間 | | | | | | | |
| 生徒総定員 | | 生徒実員 | | 専任教員数 | 兼任教員数 | 総教員数 | |
| 160人 | | 111人 | | 6人 | 31人 | 37人 | |
| 学期制度 | ■前期: 4月 1日～ 9月30日 ■後期: 10月 1日～ 3月31日 | | | 成績評価 | ■成績表: 有 ■成績評価の基準・方法 学科試験、実習評価及び学習状況の総合評価とし、60点以上を合格点とする | | |
| 長期休み | ■夏季: 8月13日～ 8月15日 ■秋季: 8月22日～ 9月 3日 ■冬季: 12月24日～ 1月 4日 | | | 卒業・進級条件 | (進級)規定の出席率(欠席日数が出席すべき日数の3分の1以内)且つ学科試験・実習評価が60点以上をもって合格、単位履修、ならびに各学年の教育に基づいたものとする (卒業)全単位履修並びに欠席日数が出席すべき日数の3分の1以内とする | | |
| 生徒指導 | ■クラス担任制: 有 ■長期欠席者への指導等の対応 随時個人面談実施し、長期欠席者0名の支援体制を継続している。 | | | 課外活動 | ■課外活動の種類 実習病院でのボランティア 地域でのボランティア その他ボランティア ■サークル活動: 有 | | |
| 就職等の状況 | ■主な就職先、業界等 医療機関・施設 ■就職率 ^{※1} : 73.7 % ■卒業者に占める就職者の割合 ^{※2} : 56 % ■その他 (平成 27 年度卒業者に関する平成28年4月1日 時点の情報) | | | 主な資格・検定等 | 理学療法士国家試験受験資格 | | |
| 中途退学の現状 | ■中途退学者 6名 | | ■中退率 4.9 % | | | | |
| | 平成27年5月1日 在学者 122名 (平成27年4月 入学者を含む) | | 平成28年3月31日 在学者 116名 (平成28年3月 卒業者を含む) | | | | |
| | ■中途退学の主な理由 進路の変更 | | | | | | |
| ■中退防止のための取組 随時担任・学科長面接実施。保護者との連携における情報交換 | | | | | | | |
| ホームページ | URL: http://www.asojuku.ac.jp/arc | | | | | | |

※1「大学・短期大学・高等専門学校及び専修学校卒業予定者の就職(内定)状況調査」の定義による。

①「就職率」については、就職希望者に占める就職者の割合をいい、調査時点における就職者数を就職希望者で除したものとす。

②「就職率」における「就職者」とは、正規の職員(1年以上の非正規の職員として就職した者を含む)として最終的に就職した者(企業等から採用通知などが出された者)をいう。

③「就職率」における「就職希望者」とは、卒業年度中に就職活動を行い、大学等卒業後速やかに就職することを希望する者をいい、卒業後の進路として「進学」「自営業」「家事手伝い」「留年」「資格取得」などを希望する者は含まない。

(「就職(内定)状況調査」における調査対象の抽出のための母集団となる学生等は、卒業年次に在籍している学生等としている。ただし、卒業の見込みのない者、休学中の者、留学生、聴講生、科目等履修生、研究生及び夜間部、医学科、歯学科、獣医学科、大学院、専攻科、別科の学生は除いている。)

※2「学校基本調査」の定義による。

全卒業者数のうち就職者総数の占める割合をいう。

「就職」とは給料、賃金、報酬その他経常的な収入を得る仕事に就くことをいう。自家・自営業に就いた者は含めるが、家事手伝い、臨時的な仕事に就いた者は就職者とはしない(就職したが就職先が不明の者は就職者として扱う。)

1. 教育課程の編成

(教育課程の編成における企業等との連携に関する基本方針)

養成教育は、その時々々の社会環境により影響を受けた医療状況の変化を速やかに反映しなければならない。医療技術の進展や患者様のニーズにより広がりを見せるリハビリテーション領域の教育に企業との連携は不可欠である。具体的には、カリキュラム作成に際して、養成教育の開始次期における動機付けのための学習や養成教育の要である臨床実習の事前・事後指導の指導に対して臨床の現場である企業からの提言を取り入れ、より現場に即した方法で、医療サービス提供のための教育内容の検討を図れる関係の構築をすすめる。

(教育課程編成委員会等の全委員の名簿)

平成28年4月1日現在

| 名 前 | 所 属 |
|--------|-------------------------------|
| 安藤 廣美 | 専門学校麻生リハビリテーション大学校 校長 |
| 大熊 一博 | 専門学校麻生リハビリテーション大学校 校長代行 |
| 河元 岩男 | 専門学校麻生リハビリテーション大学校 理学療法学科 主任 |
| 竹中 祐二 | 専門学校麻生リハビリテーション大学校 作業療法学科 主任 |
| 灘吉 享子 | 専門学校麻生リハビリテーション大学校 言語聴覚士科 主任 |
| 田中 裕二 | 専門学校麻生リハビリテーション大学校 理学療法学科 副主任 |
| 大内田 由美 | 専門学校麻生リハビリテーション大学校 作業療法学科 副主任 |
| 星子 隆裕 | 専門学校麻生リハビリテーション大学校 言語聴覚士科 副主任 |
| 黒木 洋美 | 日本リハビリテーション医学会 認定医 (宮崎大学附属病院) |
| 日高 幸彦 | 医療法人清幸会 三原城町病院 リハビリテーション科 主任 |
| 山下 智弘 | 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション科 医師 |
| 井本 俊之 | 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション部 技師長 |
| 比嘉 早苗 | 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション部 理学療法士 |
| 毛利 あすか | 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション部 主任 |
| 秋山 絵吏 | 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション部 作業療法士 |
| 前田 知美 | 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション部 言語聴覚士 |

(開催日時)

平成27年度

第1回 平成27年 9月25日 18:00~20:00

第2回 平成28年 3月25日 17:00~19:00

平成28年度

第1回 平成28年 9月23日 18:00~20:00(予定)

第2回 平成29年 3月24日 17:00~19:00(予定)

2. 主な実習・演習等

(実習・演習等における企業等との連携に関する基本方針)

企業との連携による実習は実習指導者の下でリハビリテーションおよび理学療法の実践を学ぶとともに、職業人・社会人としての態度を学ぶことであり、さらには、臨床実習指導者の指導の下、理学療法士としての心構えと基礎知識、基礎技術を臨床の場で体験し学習することである。本校の臨床実習では、担当症例を通して、情報収集・評価・理学療法計画立案・理学療法実施および記録報告等の一連の理学療法を実践する。

| 科 目 名 | 科 目 概 要 | 連 携 企 業 等 |
|---------|--|------------------------|
| 臨床実習Ⅰ・Ⅱ | 臨床の場で、患者の評価、理学療法プログラムの作成を学び、学校で修得した理論と技術を応用し、問題解決を図る基本を学ぶことをはじめとして、病院等の組織をはじめリハビリテーション科(部)、理学療法士部門の運営、管理について学び、リハビリテーションチームの一員として行動すると同時に専門職としての理学療法士の資質を養う。 | 株式会社麻生 飯塚病院などの 病院施設 |

3. 教員の研修等

(教員の研修等の基本方針)

研修は、教職員に対して現在就いている職又は将来就くことが予想される職に係る職務の遂行に必要な知識又は技能等を修得させ、その遂行に必要な教職員の能力及び資質等の向上を図ることを目的としている。
その中で、業務遂行能力向上を目的とした研修として、全教員が企業と連携した「医療機関研修」を定期的を実施しており、部門領域分野での研鑽を図っている。尚、研修に参加した教員は、その研修の成果をもって本校の業務に寄与し、研修によって付与された知識・技能等を職場において還元している。

4. 学校関係者評価

(学校関係者評価委員会の全委員の名簿)

平成28年4月1日現在

| 名 前 | 所 属 |
|--------|---------------------------------------|
| 光田 真由美 | 【保護者】 作業療法学科(夜)1年次生保護者 |
| 西村 天利 | 【卒業生】 平成18年度 理学療法学科卒業生 (株式会社 麻生 飯塚病院) |
| 松村 秀豊 | 【地域住民】 福岡市東光 公民館長 |
| 黒木 洋美 | 【有識者】 日本リハビリテーション医学会 認定医 (宮崎大学附属病院) |
| 日高 幸彦 | 【企業】 医療法人清幸会 三原城町病院 リハビリテーション科 主任 |
| 井本 俊之 | 【企業】 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション部 技師長 |
| 比嘉 早苗 | 【企業】 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション部 理学療法士 |
| 毛利 あすか | 【企業】 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション部 主任 |
| 秋山 絵吏 | 【企業】 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション部 作業療法士 |
| 前田 知美 | 【企業】 株式会社麻生 飯塚病院 リハビリテーション部 言語聴覚士 |
| 永田 俊一 | 【高等学校】 福岡県立福岡中央高等学校 主幹教諭 |

(学校関係者評価結果の公表方法) ホームページ

URL : http://www.asojuku.ac.jp/wp-content/uploads/2015/10/hvoka_arc.pdf

5. 情報提供

(情報提供の方法) ホームページ

学校法人 麻生 塾 URL: <http://www.asojuku.ac.jp>

専門学校麻生リハビリテーション大学校 URL: <http://www.asojuku.ac.jp/arc>

授業科目等の概要

| (医療専門課程 理学療法学科) 平成28年度 | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------------------------|------|------|------------|--|---------|--------------|-------------|------|----|----------|----|----|----|----|---------|--|
| 分類 | | | 授業科目名 | 授業科目概要 | 配当年次・学期 | 授業 時 数 | 単 位 数 | 授業方法 | | | 場所 | | 教員 | | 企業等との連携 | |
| 必修 | 選択必修 | 自由選択 | | | | | | 講義 | 演習 | 実験・実習・実技 | 校内 | 校外 | 専任 | 兼任 | | |
| ○ | | | 生命倫理 | 脳死・臓器移植や安楽死・尊厳死、人工妊娠中絶や生殖補助医療など、医療における倫理上の問題を引き起こす様々な事例において、どのような議論が行われているかを検討し、自己決定、自由、幸福、人権といった倫理学上の基本的な概念やそれに基づく様々な考え方を理解する。 | 1前 | 30 | 2 | ○ | | | ○ | | | ○ | | |
| ○ | | | 情報処理 | Word・Excel・PowerPointのアプリケーションソフトの基礎的な操作を習得し、文書作成、表計算・グラフ作成・データ分析、スライド作成を効率的に行うことができる。レポート、サマリー、発表会資料の作成時に活用的することができる。 | 1前 | 30 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | | ○ | |
| ○ | | | 生体力学 | 1. 人の運動を力学的に捉え、生体への力の作用を分析出来る視点を持つ。 2. 動作や介助について必要な力学を理解する。 3. 基本的動作介助の意義、目的について理解し、介助を行うことが出来る。 4. 車椅子の操作と介助が出来るようになる。 | 1後 | 30 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | ○ | | |
| ○ | | | 統計学 | 記述統計の概要を中心に、統計学の基礎理論について講述する。また、適宜演習を行うことで、実際にデータを処理し、データの性質を説明する能力を身に着ける。 | 1後 | 30 | 2 | ○ | | | ○ | | | | ○ | |
| ○ | | | 医学英語 | 英語の医学論文に慣れ、読解力を身につける。体各組織の機能や疾患について理解し、医学的な英単語を覚えることを目標とする。 | 1前 | 30 | 2 | ○ | | | ○ | | | | ○ | |
| ○ | | | 接遇講座 | 医療従事者としての接遇の心構えを学ぶ | 1前 | 30 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | | ○ | |
| ○ | | | コミュニケーション学 | コミュニケーション理論を学ぶことで、幅広い意味を持つ“コミュニケーション”を具体的に理解し自ら考え、物事を進めていくことができる。さらに他者との関わりの中に発生する事柄に対して、多様な視点と他者の立場を想像しながら、深く思考する力を身につける。 | 1後 | 30 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | | ○ | |
| ○ | | | 解剖学 | 基本的な解剖学用語を学ぶ。人体を構成する器官系の大要、特に理学療法士として理解が必要とされる構造を学習する。人体各部の構造を機能と関連付けて理解する。 | 1前 | 60 | 4 | ○ | | | ○ | | | | ○ | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|---------|--|----|----|---|---|---|---|---|--|--|--|--|--|--|--|---|
| ○ | | 機能解剖学演習 | 1. 人体の基本構造について対象部位を直接体表から触診を通して、実践的に理解を深める。 2. 触診を通して、対象部位(者)への適切なハンドリングスキルを身につける。 | 1前 | 30 | 1 | △ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 解剖学演習 | 感覚系・神経系の構造を機能と関連付けて学習する。 前期の「解剖学」の講義で学んだ人体の構造を、顕微鏡標本・骨格模型などの観察によって、より確実な知識とする。 | 1後 | 60 | 2 | △ | ○ | △ | ○ | | | | | | | | ○ |
| ○ | | 生理学 | 恒常性維持の仕組みを理解するために、まず生命の基本単位である細胞の機能について、次いで、動物機能と植物機能とに大別して体系的にその機能や意義を習得する。 | 1前 | 60 | 4 | ○ | | | ○ | | | | | | | | ○ |
| ○ | | 生理学演習 | 観察力・考察力・文章力を身につけることを目的とする。そのため、各テーマにつき実習を行い、レポート作成の方法を習得する。また、演習では国試に向けた生理学の学力養成を目ざす。 | 1後 | 60 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | | | | | | ○ |
| ○ | | 運動生理学演習 | 身体運動の生理学側面、特に運動器および呼吸器循環機能に重点を置きながら学習することにより、理学療法に必要な運動生理学の基礎的知識を理解する。 | 2後 | 30 | 1 | △ | ○ | | ○ | | | | | | | | ○ |
| ○ | | 運動学 | 1. 人体の構造（特に運動器；骨、筋、靭帯、神経など）を述べる事が出来る。 2. 各関節の構造を述べる事が出来る。 3. 各関節の正常な運動について述べる事が出来る。 4. 各関節の運動を導く筋走行を述べる事が出来る | 1後 | 60 | 4 | ○ | | | ○ | | | | | | | | ○ |
| ○ | | 運動学演習 | 1. 運動学で学んだことを再度復習し、運動器の構造および機能について理解を深める。 2. 力学の基礎を理解し、身体運動に照らし合わせて考えることができる。 3. 各関節の構造を理解し、関節可動域の制限因子について理解する。 4. 代表的な疾患の特徴を運動学的に説明できるようになる。 | 2前 | 60 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | | | | | | ○ |
| ○ | | 人間発達学 | 人は生涯をかけて発達する。生命の誕生から小児期・青年期・成人期を経て死にいたるまでの量的・質的变化を人間発達の視点から概観し、理解を深める。 | 1前 | 30 | 2 | ○ | | | ○ | | | | | | | | ○ |
| ○ | | 病理学 | 基礎医学である解剖学、生理学などにより体の仕組みと働きの基礎を習得した上に位置する病理学は、病気の原因や病態を知るため、様々な疾患を遺伝学的、構造学的、細胞学的、免疫学的、主要学的に理解できるようになることを最終目標とする。一般的に知られる病気の名前とその病態を理解し、説明できるようになることを目的とする。 | 2前 | 30 | 2 | ○ | | | ○ | | | | | | | | ○ |
| ○ | | 一般臨床医学 | 医学の成り立ちや基本姿勢、医学対象となる健康・病気概念や基本的な診断・治療について学ぶ。また代表的な疾患についての理解を深める | 1後 | 30 | 2 | ○ | | | ○ | | | | | | | | ○ |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|----------|--|--------|----|---|---|---|--|---|--|--|--|--|--|--|--|--|
| ○ | | 理学療法学概論 | ①理学療法士についてその歴史や関係法規・諸制度を概観しながら理解を深める。 ②理学療法士の職域を知り、各々の領域における思考過程や規範・哲学を概観しながら理解を深める。 ③リハビリテーション活動に参画する一専門職としての理学療法士の位置づけ、役割、対象疾患、関連職種などを理解する。 | 1 前 | 30 | 2 | ○ | | | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 臨床運動学 | 1. 正常な運動・姿勢・動作を理解する。 2. 運動学で学んだ基礎知識をもとに臨床における動作分析の意義と重要性について理解を深める。 3. 何らかの疾患によって生ずる運動機能異常、正常運動からの逸脱を種々の方法により分析する。 4. 分析結果より問題点を理解する。 5. 理解するにあたって自分の体で体験してみる。 | 2 後 | 60 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 動作分析学 | 1. 正常な運動・姿勢・動作を機器を用いて理解する。 2. 運動学・臨床運動学で学んだ基礎知識をもとに動作分析の意義と重要性について理解を深める。 3. 何らかの疾患によって生ずる運動機能異常、正常運動からの逸脱を種々の機器を用い分析する。 4. 分析結果より問題点を理解する。 5. 分析することの楽しさを学ぶ。 | 3 前 | 30 | 1 | △ | ○ | | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 理学療法セミナー | 1. 解剖学の理解とその構造について説明できる 2. 専門用語の理解 | 4 前 | 30 | 1 | | ○ | | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 評価学Ⅰ | 理学療法評価の項目と内容（意味）と必要性について述べ、各検査・測定項目について実施することができる。また、測定結果よりその障害像について考察することができる。 | 1 後 | 30 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 評価学Ⅱ | 1. 関節可動域の臨床的意義を知り、実際に施行できる 2. 筋力測定の意義を知り実際に施行できる | 2 前 | 60 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 評価学演習 | 1. 運動機能検査の神経学的な理論を、大まかに説明できる。 2. 運動機能検査の臨床的意義を知り、実際に施行できる。 3. 疾患別の評価の特徴を理解し、まとめることができる。 4. 理学療法評価の統合と解釈を大まかにとらえることができる。 | 2 後 | 60 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 運動療法学 | 1. 運動療法の概念・治療構造・根拠を知る。 2. 関節の解剖生理学について理解する。 3. 関節可動域制限とその治療法について理解する。 4. 筋機能障害とその治療法について理解する。 5. 上記知識を臨床応用できる。 | 3 前 | 60 | 2 | △ | ○ | | ○ | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|-----------|--|--------|----|---|---|---|---|---|---|--|--|--|--|--|--|--|
| ○ | | 物理療法学 | 1. 物理療法の種類、定義、目的の説明ができる。 2. 各物理療法の治療効果、適応、禁忌の説明ができ、適切に実施できる。 3. 各物理療法機器の取り扱い、リスク管理ができる。 | 3 前 | 60 | 2 | △ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 日常生活活動学総論 | 1. 「ADLの概念と範囲」を理解する。 2. 「ADLの評価」の意義・目的・実施方法を理解する。 3. 「リハビリテーション支援機器」について理解する。 | 2 前 | 30 | 2 | △ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 日常生活活動学I | ・ADLの中の基本動作の位置づけと理学療法と基本動作の関係を理解する。 ・基本動作(寝返り、起き上がり、立ち上がり、座位、立位)の姿勢分析、動作分析ができる ・代表疾患の基本動作における代償の特徴と機能障害を結びつけ分析できる ・基本動作の指導ができる | 2 後 | 30 | 1 | △ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 日常生活活動学II | 1. 日常生活におけるセルフケアの役割について理解する。 2. 日常生活を支援する機器について理解する。 3. 疾患別日常生活の障害について理解する。 4. 日常性活動訓練について理解する。 | 3 前 | 30 | 1 | △ | ○ | ○ | △ | ○ | | | | | | | |
| ○ | | 義肢装具学 | 1. リハビリテーションにおける義肢装具の重要性と役割について理解する 2. 義肢装具の種類・目的・構造について理解する 3. 装具の疾患に対する適応・活用方法を理解する 4. 装具作製の経験により作製の過程と構造の理解を深める | 3 前 | 60 | 4 | △ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 神経障害 I | 1. パーキンソン病とパーキンソンニズムの違いについて説明できる。 2. パーキンソン病を捉えるための適切な情報収集が出来、問題点と目標の考え方が理解できる。 3. パーキンソン病に対する運動療法の項目を挙げ、理論的根拠を理解した上で施行することが出来る。 4. 運動失調の分類と代表的疾患を挙げることが出来る。 5. 運動失調を捉えるための適切な情報を収集できる。 6. 運動失調に対する運動量の項目あげ、理論的根拠を理解した上で実際に施行することが出来る。 7. その他の神経疾患について、代表的疾患を挙げ、理学療法の方法を説明できる。 | 3 後 | 60 | 2 | △ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----|--|----------|---|-----------------|-----|---|---|---|---|---|---|---|--|--|--|--|--|--|--|
| ○ | | 地域理学療法学 | 1. 地域リハビリテーションの概要とICFの関係について説明できる。 2. 地域理学療法に関係する介護保険制度及びそのサービスの目的・効果について説明できる。 3. 事例を作成し、地域理学療法に必要な支援計画が作成できる。 | 3 前 | 60 | 2 | △ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | |
| ○ | | 理学療法基礎演習 | 理学療法臨床基礎演習は、早期臨床体験演習の位置づけであり、見学と体験（クリニカルクラークシップ）を通し、医療人としての態度・振る舞いを身につけ、理学療法プロセスを経験することを最大の目的とする。 | 2 後 | 40 | 1 | | ○ | ○ | △ | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 評価実習 | 理学療法教育の総括的かつ臨床実習に行く前の準備として重要な一環と位置付け。医療人、また理学療法士としての資質を養うことはもちろん多様な患者を体験し、評価・目標設定・理学療法プログラム作成ができることを目的とする。 | 3 後 | 120 | 2 | | ○ | ○ | △ | ○ | | | | | | | | |
| ○ | | 臨床実習Ⅰ | 評価実習を踏まえ、これまでに学習してきた知識・技術を臨床場面に適用し、適切な実習指導を受け理学療法プログラム立案・治療を目標とする。 | 4 前 | 400 | 8 | | ○ | ○ | △ | ○ | ○ | | | | | | | |
| ○ | | 臨床実習Ⅱ | 理学療法治療の実施、経過の記録、再評価および最終評価など一貫した理学療法を習得することを目標とする | 4 後 | 400 | 8 | | ○ | ○ | △ | ○ | ○ | | | | | | | |
| 合計 | | | 57科目 | 3150単位時間（127単位） | | | | | | | | | | | | | | | |

| 卒業要件及び履修方法 | | 授業期間等 | |
|---|--|-----------|-----|
| 各授業科目の総授業回数の3分の2以上出席し、前条第1項の規定においてC評価以上取得した者に対して履修を認定する。卒業は、最終学年次に履修すべき科目（実習を含む）を全て履修している者で学校長が認めた者とする。 | | 1 学年の学期区分 | Ⅱ期 |
| | | 1 学期の授業期間 | 15週 |

（留意事項）

- 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合については、主たる方法について○を付し、その他の方法について△を付すこと。
- 企業等との連携については、実施要項の3（3）の要件に該当する授業科目について○を付すこと。